

ふくしま共同診療所 活動日誌

診療所で「無料エコー検査」を実施しました

9月21日、「無料健康相談会・甲状腺エコー検査」を実施しました。新型コロナの影響で1年近く開催できずにきましたが、感染対策などもさまざま検討し、規模は小さくなくても診療所でやるのではないかとということで、実施にこぎつけました。

県の甲状腺エコー検査が中断していることもあり、今回は高校1年生のいるご家族の参加がありました。ある学校では「一般医療機関で甲状腺エコー検査を受けた場合、学校検診からは除外される」と言われているとのことをお話を聞きました。学校検診そのものを縮小しようとする一方で、他の医療機関での検査を抑制するよう、学校を通して圧力をかけている状況が見えてきました。

学校検診を縮小させないための取り組みとともに、独自の甲状腺エコー検査を続けることの重要性を実感したところです。
(ふくしま共同診療所・須田)

基本政策から「震災復興、原発事故」を削除した菅政権

安倍首相が辞任し、菅首相が登場しました。安倍政権のもとで恥知らずに進んだ政府の私物化は、日本学術会議任命拒否に示されるように、むしろ増進しそうです。そもそも菅首相こそ、安倍前首相の犯罪行為の証拠隠滅や公文書偽造、居直りに自ら手を汚してきた張本人でした。黒川検事総長人事では失敗したとはいえ、検察機構を私兵のように扱い、安倍前首相に対する告発をすべて不受理とさせ、もみ消してきたのが菅首相でした。記者会見でも、質問の内容には答えることなく「ご指摘にはあたりません」を繰り返してきました。

後継首相決定の密室での談合は、政権私物化の仲間たちがその利権を維持するためのものだったことを明らかにしています。前政権時に「問題点を洗い出す」と言っていたはずの「桜を見る会」についても、検証を打ち切ると宣言しました。洗い出させれば当時の官房長官の役割も明るみに出るかもしれません。

菅首相は、幹部職員に関して「政府と方向が違おうようだったら異動してもらおう」と宣言しました。批判されてきた「付度」をさらに求めるということでしょう。重点政策も、菅新首相と親密な個人の顔がみえそうなものばかりです。例えば「携帯電話通話料の値下げ」も、楽天社長と菅首相との特別な個人的関係が伺えます。政権の私物化がさらにすすむ可能性さえあります。

新内閣の「基本政策」から、東日本大震災からの復興、東電福島第一原発事故対応の項目が削られていたことも明らかになりました。指摘を受けて復興相は「字数の関係で入れられなかった」と弁解していますが、それこそ、福島を切り捨てたいという本音が表れたところでしょう。福島の現場でこそ、切り捨てを許さない医療実践の必要性が強くなっています。

飛田晋秀写真展

3.11 から 10 年—福島のみま

8月29～30日、福島県三春町在住の写真家・飛田晋秀(ひだ・しんしゅう)さんの写真展を開催しました。

飛田さんは3・11大震災以来、「原発事故の被害を風化させてはならない」という思いで、避難区域の様子を記録してきた方で、日本のみならず、ヨーロッパなどでも写真展を開催しています。飛田さんはつねづね、「全国や海外で写真展や講演会を行なって感じるのは、福島県が一番風化している。内堀県知事は国の言いなり、国や県がいっさいをなかつたものにして原発を再稼働させていこうとしている」とおっしゃっていました。そこで今回、福島市で写真展を開催することになりました。

写真展には、浪江町や飯館村から避難されている方をはじめ、県内から多くの方に来場していただきました。写真をじっくりと見ながら震災当時の話や故郷の話でおおいに盛り上がりました。



来場者の感想

「事故直後、転々として横浜まで避難し、警戒区域になる直前に浪江に一時戻ると、ブタや牛が闊歩していたことを思い出した」
 「子どもたちの感想文を読み、胸が熱くなった」
 「避難中の津島(浪江町)の人間です。一方的に避難させられ先が見えない。早急に帰れる環境をつくること。戻りたくても戻れない、ひどい」
 「牧場を再開できぬまま去った。今は何でもなくても将来大変なことになる」
 「大変貴重な記録。ぜひ次世代の子どもたちに見せるように全国の教科書に載せてほしい」

最終日のギャラリートークでは、飛田さんが原発事故への向き合い方を熱く語ってくれました。「年間20ミリシーベルト以下は安全だとして、避難指示を解除し帰還していいという。日本の基準『年間20ミリシーベルト』を世界の基準にしようとしている」「復旧しないでどうして復興ができるのか。常磐線、道の駅、学校を人のいない高線量の帰還困難地域に作る事が本当に復興なのか」「真実を伝えていかないと福島の子供たちが原発作業をさせられることになる」「写真を通してこれからの子供たちに伝えていきたい。子や孫のためにも伝えていくことが私たちに課せられた仕事だと思う」

会場では『トリチウム汚染水の海洋放出問題について』のアンケートも行いました。

「ならぬものはならぬ、絶対反対」「日本中がタンクで埋もれるまで」「責任転嫁は許せない」

震災・原発事故から10年を迎えるフクシマへの向き合い方が、あらためて深まった写真展となりました。